

W子の葛藤

—W子と共に乗り越えたること—

上坂 元絵里



私たちの園では、登園後、朝のあいさつ、うがい、手洗いを済ませて一日の生活が始まる。その後は、降園まで自由に遊んで過ごす。私たちは、子どもたちが自ら選び取り、主体的に過ごすことを一番大切に考えている。園にいる間は、子どもの自由な時間を保証したいと。けれども現実には、子どもたちの幼稚園での自由な時間の背後には、入園の翌日から、さまざまなもの

要素が絡んできていると思われる。例えば、入園前からの知り合い、ご近所同士、通園のルートが同じ、ひとり通園の方向が違う、一人っ子、兄弟が多い、親自身が人づきあいがいい、その逆等々が思い浮かぶ。子どもたちは同じスタートラインに立っているとは言えないだろう。子どもたちと生活しながら、そうした背後関係との絡みでしばしば難しさを感じる。逆に、幼

幼稚園での子ども同士の出会いがきっかけになつて、親同士も知り合いになる、ということももちろんたくさんある。しかし、ある日、今まであまりかかわりのなかつた二人がとても仲良く遊んでいて『よかつた』と思つていると、前日の降園後に一緒に遊んだことがきっかけだつたとわかつて、ちょっとがっかりすることなどもある。

W子の幼稚園生活のスタート

W子は年中で入園した。入園式の次の日、ふとW子の顔を見ると目に涙がにじんでいる。何とも不安げな様子、しかし、私が見ていることに気がつくとあわてて目をこすり、ワーッと泣くに泣けないでいた。二日

園生活のスタートは、とても緊張しながら、母と別れられないとか、泣きわめくということではなく、保育者の動きを必死で追い、一日に一回いっしょにお山に行くことが支えといつた様子だった。

五月に入ると、時々、ままごとコーナーの畳にボーッと座つていたり、「つまんない」を連発することも多くなる。『表情が冴えないな、自分からは遊べないようだ』としばしば感じる。しかし、楽しそうに遊ぶ他の子どもたちに誘われて、砂場で初めて裸足にこの日も私がお山に行こうとすると「どこ行くの？」

とついてくる。また「先生の赤い靴、かわいいね。私はキティーちゃん」と言う。中学生が初めて仲良くなるときに、持ち物をほめて近づきになるような感じに近いなと思う。数日後、今度はお山に行こうとしていた私に「W子もいっしょに行つてあげようか」と言う。あまのじやくな言い方が、微笑ましかつたが、ストレートに「私も行きたい」とは言えないんだなど、どこか大人的だという印象を抱く。このようにW子の

なつて遊んだり、自分から「一人で遊ぶのはいやだ」とはつきり言つたり、もうひとつのW子の顔も見えかくれした。

W子らしさが現れてくる

五月も終わりに近づく。父と登園したW子はすぐに「K子と遊びたい」と言つて遊びだす（K子は、早生まれで小柄だが、大きな兄が二人いて、なかなかしつかりもの。気持ちが安定していて、非常にマイペースで興味のあることに没頭して過ごせる子だった。W子が魅力を感じたのはそうした性格からだろう）。お弁当の時も自分でさつと場所を決めて座り、午後もすぐ遊びだす。数日前に作ったラーメンを取り出して欲しい、と言うので渡すと「もう一つ作りたい」と言う。上手に紙を切つて「セット作る。私「出前に行こうか?」W子「森の組へ行こう」私「(森の組は)もうお帰りなのよ」W子「じゃ、ここ(海／年長組)に

しようか」と、他のクラスに出前に行く。この日、W子が自分の意志を持って動き出したと、そしてきっかけがあればW子はこんなに動けるのだと感じた。

仲良しのグループ

その後、同じく年中から入ったK子、A子、S子と遊ぶことが多くなる。夏休みの様子などからも、親同志もつきあいがあり、いつしょに出かける機会もあつたことがうかがわれた。園庭の中央にあるジャングルジムや太鼓橋の下にゴザを敷いて、ままで道具を持ち出し、ポケモンごっこなどをして、繰り返し飽きずに遊んでいた。このグループでは、A子が自分の考えをはつきり主張して、自分の思うとおりに仕切ることが多かつた。そのA子にとつては、S子と一番遊びたい、K子が一番目という思いがはつきりしていた。I子もいっしょに遊ぶ仲間に入つてはいるものの、自分が友達から求められているという気持ちを充分には持

てずにいたと思う。なんとなくいつしょにいれば安心、一人にならずに済む、今になって考えるとそんな感じでA子たちにくついていたのではなかつたかと思う。しかし、その時の私は、入園してから何ヵ月かが過ぎ、なかなか動けなかつたI子が自分なりに居場所を見つけたと少しほつとしていた。

その後もW子は相変わらず、S子、K子、A子などといつしょにいることが続く。そのうち、S子が大泣きすることが多くなる（S子自身は、おつとりとした物腰で人当たりもやさしい。しかし、まわりのことは良く見ていて、自分なりにじつくりと遊ぶ、そんな子どもである）。原因を聞いてみると「A子が怖く言った」と訴える。A子の、自分中心な強引さが気になりだす。そのA子自身はとくに、幼稚園という場でまだまだ安定を得ていなかつたため、S子たちといつしょにいることが園で過ごす支えになつていたのだと思う。友達とのかかわりの中での強さ、わがまま

さが気になつたが、友達が自分から離れることが怖くてK子と、K子がだめならS子と、あるいはW子と、特定の人といつもいることにこだわつた結果だつたのだろう。この時期のW子にとつては、多少強引でもA子が、いつしょに遊ぼうと引っ張つてくれるとは、むしろ居心地がよかつたのかもしれない。私は、K子、S子、W子の中からA子に対する不満や自分の考えをもつと表現しようとする動きが出てきて欲しいと感じるようになる。とはいへ、四歳児、三十五人の生活は目まぐるしく、A子たちは結構自分たちで遊んでいるため、気になりながら充分にかかわることができなかつた。

本領発揮？



三学期、二月

に入る。I子の

声がよく聞こえ

てきて、とても好調に感じる。鬼ごっこ、ドンジャンケン、いす取りゲームなど、保育者といつしょに遊ぶ経験を持つたルール性のある遊びを好んで、繰り返して自分たちでよく遊んでいる。S子との関係を基盤にして、かなりいろいろな人と柔軟にかかわっている。

人懐こく快活なT夫、やはりまだ特定の友達関係がないO子もこうした遊びに加わることが多かった。J子やH子とも遊びたいらしく、積極的に話しかけている。しかし、そのJ子やH子との関係は、時折のもので、あまり深まつていかなかつた。J子やH子は、W子に否定的に対するわけではないが、心からW子を受け入れているとも思えなかつた。

W子の兄は体が弱いため、時々、家庭の都合で早退

をしなくてはならないことがあつた。この頃になると

「何で、帰るの？ いやだ」と母に対しても言えるよう

になる。W子はどちらかといふと、園で過ごしているように思つていたので、早退をいやがる様子

に、少しほんでも園での生活が楽しくなつたのかしら？ 自分だけがお友達と違つて早く帰るのがいやだと言えるようになつたのかしら？ と少し嬉しく思う。

ちょうどこの頃、保護者会で母が次のように発言。「二学期のある日、W子がお迎えに来た母に対しても『おかあさん、何かいいことがあつたの？』と聞いた。母『どうして？』W子『だって、おかあさん、にこにこしてたよ』やつと、その頃になつて私自身幼稚園に慣れてきたんだと思ひます」。

この話を聞いて、母自身が幼稚園に慣れることが大変だったのだなということ、W子が人の気持ちを敏感に感じる感性を持つていていたのだなということ、両方が印象に残つた。

年長に進級して

四月、W子は登園すると「本を読んでいいですか？」と私に尋ねて、ひとりで本を読んで一日をス

タードする日が何日か続いた。今までだつたら、そんな時は何となくA子やS子のところへ「何やつてゐる? 入れて」と言つてはいたのに、あえてそうした選択はしないように感じた。A子たちとの、特定の関係から一步踏み出そうとしているようにも、もつと気の合う友達を求めてはいるにも感じる。ひとりで過ごすW子も、淡淡と落ち着いているようにならぬもしく感じる。そして、気が付くと以前から時々いつしょに遊んでいたT夫と遊び始めたりしていた。

四月の保護者会での母のひとこと。「年中の三学期ごろから、W子の口からいろいろなお友達の名前が聞かれるようになりました。私の方は、お母さんとお話をすることも無いような名前もあつて、お母さんたちも、子どもに負けずに、壁を取り払つて広くお付き合いができるといいなと思います」と、言いにくいくことを思つて話す様子に、私は、言うべきことはきちんと

と言う母の誠実さ、私自身とても共感することを話してくれた母への敬意と、現状としてはやはり、親同士のつきあいには、ある種の閉鎖性があるのでなという失意とを感じた。

W子ちゃん、頑張つてゐるな

五月一日、朝うがいをするとき、ちょうどいつしょになつたY夫と終日いつしょに遊ぶ。Y夫にすすめられて、ミニ四駆のタイヤマシーンも作る。お帰りの頃は、T夫やK夫もいつしょに遊んでいた。今まで、あまり遊んだことのなかつたY夫と、終日遊べたことが嬉しくて私は、Y夫の母にも降園時に報告する。更にこの日以前にも、J子やH子に、自分から声をかけていつしょに遊び始める姿を見かけていた。私はW子が変わつたな、たくましくなつた、積極的に頑張つてゐるなど感じていた。

幼稚園に来たくない

ところが翌日の降園時、母から「ちょっとお話をしたい」と声をかけられる。

「このところ、朝、幼稚園に来たくないと言ふんで

す。なんか、安心して遊べる特定のお友達がないよ

うに思ふんですけど……」と。私としては、W子がたく

ましくなつたと感じていた矢先のことで、最初はとて

も意外に思う。しかし『ああ、W子ちゃん、本当に頑

張つていたんだな』と思ひ知らされる。

母に対しては、W子が今までの固定的なお友達から
一步抜けて、積極的にJ子やH子と遊んだりしている
様子を伝え、一方でここは安心といえるような特定の
友達関係が今はないと話す。W子の、心のうちにひとつ押さえ込んでしまう性格を考えると、頑張つて疲れ
ちゃつたら「行きたくない、幼稚園休む」と言えること
も大事かもしれないなどと話す。母の話から、今W

子にとつてはH子と遊べることがとても嬉しいということも確認できた。

W子の葛藤

W子の母との話を受けて、H子の母に対して「W子ちゃんが、最近H子ちゃんのことが大好きで、遊べる」と嬉しいようです」とさりげなく話してみたりもある。その影響か、H子が「W子ちゃん、W子ちゃん」と声をかけてくれることが続き、W子は嬉しそうだった。しかし、しばらくすると、一人で戻つてきてしまつたり、何となく表情が冴えなくなつてしまつた、H子に加えて、R子、J子などと四人くらいで遊んでいると、W子だけが、何となく隅に追いやられてしまう。黒板に三人が絵を書いている。気が付くと、



W子だけが、黒板に近づけずに、もじもじとしている。「どうしたの？」と聞くと「Wちゃん、入るところがない」と言う。他の子も特に意地悪をしているといふではないのだが、押しやられてしまう。子どもの

中での力関係の難しさを感じる。保育者が、W子の背中をちょっと押してあげつつ、力関係を強くコントロールしてしまわない、そんな微妙な支えになることが必要だと感じる。

そして今、これからを考える

このところ、原稿を書きながらW子のことを気にし続けている。保育の中で困難な状況に置かれると、必ず原因を探り、対策を考える。W子の場合、本人、母親に原因を求める部分は少ない。強いて言えば、眞面目すぎること、自分から発想を思いついてイメージ豊かに遊べるタイプではないということくらいである。それだけに、私としてはなんとかしなくてはという思

いが強い。

（五月二十日）お誕生会の後、「W子ちゃん、遊びがない」と訴える。私「遊び人って、Wちゃんは誰と遊びたいの？」、W子のことが気になつていて私。自信をなくしてオドオドしてしまうW子を見るにつけてそのオドオドした態度がお友達とのかかわりで余計ネックになつてしまふのよ」と感じてしまい、W子に對してどこか、詰め寄るような調子が出てしまつたと反省する。H子とせつかく遊んでいたと思つたら部屋へ戻つてきたW子。しかも、H子が「W子ちゃんがいなくなつた」と探しにきてくれる。私としては『H子がせつかくこんなふうに接してくれてているのにどうして?』と思つてしまふ。W子は「外で遊びたくないた」と言う。保育後に考えると、私の方のH子とうまくいかないかしらという思いが空回りして、本当にW子が求めている気持ちにはそぐわなかつたのだろうと思う。

「五月二十一日」 今日も、W子は「遊ぶ人がいいな」「(お弁当の時)どこに座ろう」と訴えかける。

「そうね、だれと遊ぼうか?」「どこがいいかしらね?」、今日の私は、まずW子の言つたとおりの言葉を返して、それから「だれと座りたいの?」とたずねていた。結果的には今日のW子はO子と多くの時間を過ごした。O子自身、まだまだ人間関係が安定していないのでちょうど具合がよかつたとも言えるかもしれない。そして、この関係が続くかどうかはわからぬい。

このように、私自身毎日迷いながら、過ごしている。とても気になることがあると、そのことを何とか乗り越えたいという気持ちが強くなり過ぎて、自分の動きが問題解決的になつてしまつていることも感じる。そんな中で今、思うことは、一番大変なのは、W子自身であること、そして保育者である私は、何とかすることが大事なのではなくW子が何とかする力をつ

けていかれるようにな此やつてみることなのだと思つてゐる。

W子は友達を求めているのに、なかなかうまくいかけず壁を感じてゐる。その背後に親同士の人間関係の難しさも絡んでいるように思う。大人自身が、子どもを通じて、保護者としてこの組、園という集団に属している。その中で、自分の居場所を確保することに必死で、周りの人々までなかなか気持ちが向かないようになる。その結果、固定的、排他的な関係が生じやすい。子どもたちのためにも、親同士の人間関係がもつと広く豊かになつてほしいと思う。現状をあれこれ言うのはたやすいが、具体的にどう働きかけていくかが肝心なことだ。今、そしてこれから考え続けなくてはならない大きな課題である。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)